

10. アレルギー性鼻炎に対するインターナル点鼻液ネブライザー療法の治療成績

椿 茂和（国立王子耳鼻科）川久保 淳（厚生中央耳鼻科）
渋井弘一（あそか耳鼻科）安部治彦（都立広尾耳鼻科）
須貝六実（日本通運耳鼻科）

<研究目的>

アレルギー性鼻炎患者が2%インターナル点鼻液を、定量噴霧器で自己噴霧を行う時、必ずしも完全に行えるとは限らない。そのために、自己噴霧の一部をネブライザーによって行えば、薬剤が深達して治療効果が上がるのではないかと考えて、試験を行った。

<研究方法>

対象は表記5病院を訪れたアレルギー性鼻炎患者101名（男41、女60）である。患者は無作為にネブライザー群と非ネブライザー群に分けられた。

ネブライザー群は、インターナル点鼻液1回0.5mlを用いたネブライザーを、1週3回、4週継続して12回行い、自己定量噴霧は1日4回行わせた。

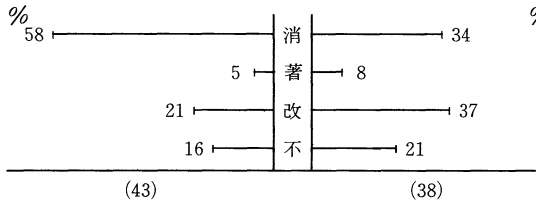
非ネブライザー群は自己定量噴霧だけを1日6回、4週続けて行わせた。

<成績>

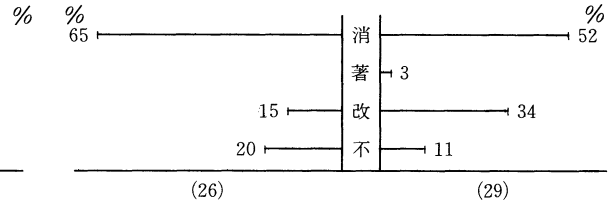
設定した条件で治療を終了したネブライザー群45名、非ネブライザー群40名について検討を行った。両群の患者背景は均質なものと判定した。

自覚症状、他覚所見に対する効果は第1図に示す。

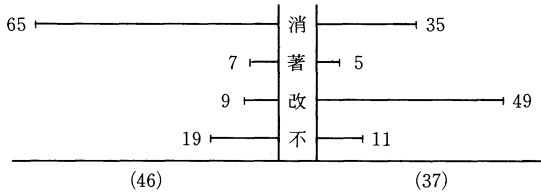
1. くしゃみ発作



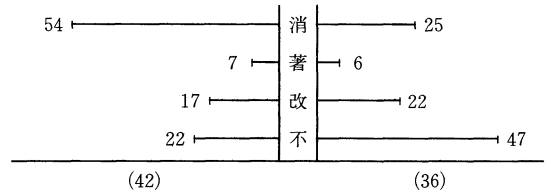
6. 日常生活の支障度



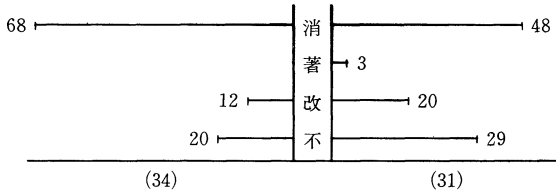
2. 鼻汁



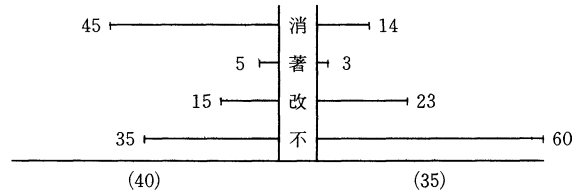
7. 下甲介粘膜腫脹



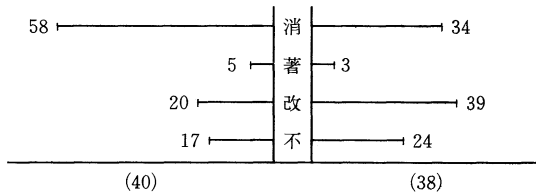
3. 鼻閉 (普段)



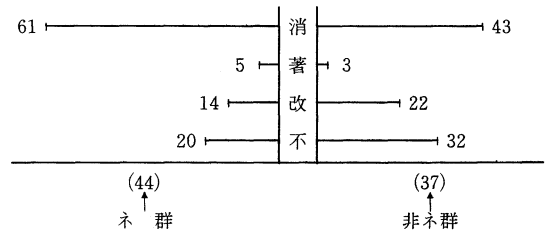
8. 下甲介粘膜色調



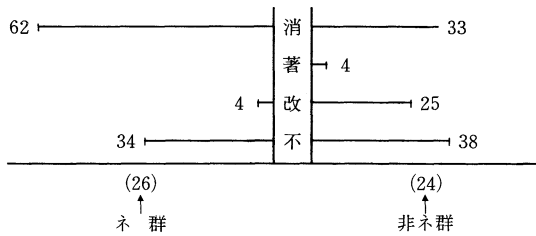
4. 鼻閉 (発作時)



9. 水性分泌



5. 嗅覚異常



消：消失
 著：著明改善
 改：改善
 不：不変

ネ群：ネビュライザー群
 非ネ群：非ネビュライザー群

() 数字は例数

第 1 図

1) 自覚症状

ネビュライザー群では、症状の消失したものは、すべての症状で58~68%と50%以上であった。非ネビュライザー群で症状の消失したものは、普段の鼻閉と日常生活の支障度を除いて、34~35%と40%以下であった。

消失例と著明改善例を合すると、20~30%の差でネビュライザー群の方がよかった。

改善例は非ネビュライザー群の方が多かった。

2) 他覚症状

ネビュライザー群で所見の消失したものは、粘膜の色調を除いては、54~66%と50%以上であった。非ネビュライザー群の消失したものは、水性分泌を除いては25%以下であった。

消失例と著明改善例を合すると、水性分泌以外は、ネビュライザー群が非ネビュライザー群の2~3倍であった。

不変例は非ネビュライザー群の方に多かった。

3) 総合判定

	著効	有効	やや有効	無効
ネビュライザー群	21	15	3	6
	80%			
非ネビュライザー群	7	19	8	6
	65%			

(第1表)

第1表に示す。著効はネビュライザー群が47%、非ネビュライザー群が18%で、ネビュライザー群が2.6倍であった。

著効+有効の有効率はネビュライザー群で80%、非ネビュライザー群で65%であった。

両群の間の有効率の差は15%であったが著効は30%の差があった。

4) 効果発現時期

	3日以内	1週以内	2週以内	3週以内	4週以内	不明確
ネビュライザー群 (有効39例)	2	14	21	1	1	0
	94.8%					
非ネビュライザー群 (有効34例)	3	10	13	6	0	2
	76.4%					

(第2表)

第2表に示す。1週以内までに効果の発現した例は、両群の間にほとんど差はなかった。

2週以内に効果の発現した例は、ネビュライザー群で54%、非ネビュライザー群で38%であった。すなわち、ネビュライザー群では、2週以内までに効果の発現した例は94.8%で、ほとんど全例に近いのに、非ネビュライザー群では76.4%と $\frac{3}{4}$ であった。

<結論>

2%インター点鼻液の自己定量噴霧の一部を、鼻腔内の深達性をはかりながらネビュライザーを行った結果は、自己定量噴霧だけを行った患者より、自覚症状、他覚所見、総合判定はすべてすぐれてより、効果発現も大多数が2週間以内であった。

インター点鼻液のネビュライザー療法は効果を高める上で、必要な処置と考えられる。